

第17回高知市総合教育会議 議事録（概要版）

- 1 日 時 令和5年1月23日(月)
開会：午後2時30分 閉会：午後4時00分
- 2 開催場所 高知県立県民文化ホール 4階 第6多目的室
- 3 出席者
- (構成員)
- | | |
|--------------|--------|
| 高知市長 | 岡崎 誠也 |
| 高知市教育委員会 教育長 | 松下 整 |
| 委 員 | 谷 智子 |
| 委 員 | 西森 やよい |
| 委 員 | 野並 誠二 |
| 委 員 | 森田 美佐 |
- (市長事務部局)
- | | |
|----------|-------|
| 高知市副市長 | 中澤 慎二 |
| 高知市副市長 | 松島 研 |
| 総務部部長 | 橋本 和明 |
| 総務部副部長 | 谷脇 由人 |
| 政策企画課長補佐 | 井上 祐幸 |
| 政策企画課主査 | 清遠 佳澄 |
| 政策企画課主査 | 加嶋 竜也 |
- (教育委員会事務局)
- | | |
|-------------------|--------|
| 教育次長 | 山中 浩介 |
| 教育次長 | 岩原 圭祐 |
| 教育政策課長 | 岸田 正法 |
| 教育政策課長補佐 | 島崎 由紀子 |
| 教育政策課主幹総務担当係長事務取扱 | 神岡 純子 |
| 教育研究所長 | 西田 尚弘 |
| 教育研究所副所長 | 吉本 恭子 |
| 教育研究所教育相談班班長 | 刈谷 美和 |
| 図書館・科学館課担当参事 | 高石 敏子 |
| 図書館・科学館課長 | 弘瀬 友也 |
- 4 議 題
- (1) 高知市の不登校対策 ～羅針盤としての11校の先進的な取組～
 - (2) オーテピア高知図書館取組報告

5 議事の経過

- (1)「高知市の不登校対策～羅針盤としての11校の先進的な取組～」について、教育委員会事務局から資料に沿って説明。

● 議論

(谷委員)

先進的な取組をしている11校の不登校出現率の推移や、取組によってどのように状況が変わったのかがとても重要だと考えている。今回の説明を聞き、しっかりと分析され成果も出ていることが分かり非常に嬉しく思った。

不登校出現数は、中学校が依然として多くスピード感を持って不登校対応をしなければいけないと思う。資料にもあるが、早期に気付き、適切で丁寧な初期対応に力を入れることが一番大事だと思う。不登校となる様々な子どもがいる中で、関係機関との連携や研究所の専門的な対応は十分できていると思うが、今やるべきことは、早期対応をどのようにするかである。私は、子どもが学校を休み始めて最初の3日間が一つの節目だと考えている。3日以内に対応できれば、子どもが学校に戻ってくる可能性が非常に高くなる。資料の8ページにある、A・B・D小学校、E中学校は初期の対応スピードがすごく早い学校ではないかと思う。9ページを見ると、B小学校が11名減少、D小学校が13名減少、E中学校が9名減少している。このように減少させることがどれほど大変なことか、学校として努力してくれていると感じる。また、担当教員が配置されたというメリットだけでなく、いかに学校が組織として、チームとして取り組んできたかというところで成果が違ってくると思う。

次に、教育研究所が作成した実践事例集については参考になると思うが、先生は忙しく、じっくりと読む時間がないので、具体的で単純な内容をワンペーパーにまとめる等、11校の良い例を手軽に見られるものがあればいいのではないかと思う。

(西森委員)

説明を聞く中で、保護者の立場でどう関わっていけるのか、どう取り組んでいただけるのかを考えていた。子どもが学校に行かなくなった、行けなくなったとき、多くの保護者は不安になる。子どもに対して理想的な声掛けをしたいがどうしたらいいかわからないこともあるのではないかと思う。そういったときに、学校の取組を知ることによって信頼感を持つことができ、またそこで協力し合える関係性を作ることができる。そして、子どものことについて、学校と腹を割って意見交換し、認識を共有するための努力をすることもできる。しかし、学校の取組がわからないと余計な不信感を持ってしまい、学校と保護者でチームを形成できない。保護者の位置付けをどのようにしていくのか、保護者を関わらせることで良い事例があったのか、お伺いしたい。

(教育研究所 西田所長)

まず、谷委員の欠席対応に関するご意見については、高知市では不登校対応スタンダードというものを策定し、各学校において同じような対応をお願いしている。例えば、欠席対応の基本パターンは、欠席1日目で電話、気になる欠席なら2日目で家庭訪問、3日目で必ず家庭訪問をするというような形である。子どもの状況によって、欠席をした初日でも家庭訪問する等、子どもの実態に応じた柔軟な対応をするよう各学校に依頼している。

次に、指定配置校11校の好事例の発信については、現在、11校の取組を、初期対応や不登校の状態、子どもたちの支援、居場所づくり等の章に分け、効果的だったものについてまとめる作業を行っている。初期対応で特に効果が出ている取組については、実践事例集という形で先生方に発信していくことを検討している。また、昨年発刊した「あるあるヒント集」の冊子を本日の会議資料として配布している。初任者や採用2、3年の先生方が、これを研修の課題と位置付け、実際に取り組んでいただいた。その中で上手くいった事例や、上手くいかなかったが改善策を考えた事例なども紹介している。今後は、研修や学校の実践の中で、こういった冊子を効果的に活用していただきたいと考えている。

西森委員から保護者への関わりという部分でご意見をいただいた。不登校になった子どもを持った保護者が、非常に不安な思いをされていると私たちも認識している。不登校の子どもたちを支援するため、各学校に組織的な支援会を開催している。保護者にも支援会にご参加いただき、子どもをどのようにサポートしていくのか話す場を持つことで、学校と一定の目標を持ち、スモールステップで、学校、保護者と共に取組を進めている学校もある。それにより、子どもたちの欠席日数も減り、状況が改善したという報告も受けている。

(野並委員)

日本医師会が全国会長会議を2か月に1度開催しており、各県の色々な問題についてテーマごとに発表している。先週東京で開催されたときのテーマが、偶然にも、学校保健をめぐる諸課題についてであった。他県が学校保健をめぐる諸課題や学校健診に関わる問題について発表する中、私は高知県における不登校についての取組を発表した。先ほど事務局から説明があったような資料を基に発表したところ、高知県が良い取組をしているということで誇りに思った。

ただ、本来学校保健に取り組む医師会が、不登校にどこまで取り組めるか、そこにどのように関わっていかなければいけないかという課題が残っていると思う。私は、不登校になる前の段階での取組が必要であると考えている。全国的な話として、学校保健をめぐる諸課題すべてに対し、医師会と教育委員会がもう少し連携をとる必要があるのではないかと考えている。不登校の未然防止について、今後、医師会が色々な形で何らかの関わりをしていかなければならないだろうと感じた。

(岡崎市長)

不登校にはそれぞれ原因があると思うが、今後は医学的な知見が必要になるのではないかと思う。小さい頃からの多動行動について取り上げられることがあるが、なぜ多動行動をするかというのは、まだ医学的な知見が十分でなく、色々な分析をされている先生がおられる。今後分析が進み、医学との連携もいずれ必要になると思っている。

(森田委員)

まず、取組を冊子化したということについて、どの学校でも一律に情報が入手でき、またその実践を発表することで、他の先生方も学ぶことができるのは非常に良いことである。また、先生方はお忙しいので、不登校担当の先生を置くということも大事なことだと思う。

次に、不登校になる子どもから何かしら発せられている前ぶれやサインに気づける心の余裕を持つことが、先生にとってなかなか厳しいのではないかと感じる。例えば、大学の学生が集めたデータでは、友人関係の他に、先生との関わりの中で学校に行きたくなくなるというものがある。先生は子どものために色々取り組んではいるが、先生の言葉や行動が子どもにどう映るのが問題となる。

更に、先生同士で雑談ができる環境にあるのか。担任のクラスだけでなく、他のクラスの子どもたちを見て些細なことに気付き、雑談できるような環境であれば何か違ってくるのではないかと感じた。

今、働き方改革が進み機械やシステムを取り入れているが、その分の空いた時間をどこに使えているか、子どもたちに使えているかという点検が必要なのではないかと考える。

(教育研究所 西田所長)

子どもの心の状況を把握するため、高知市では、正しい学校生活を送るためのアンケートを5月から6月にかけて実施している。アンケートは子ども自身に回答してもらうため、子どもの今置かれている状況などを確認することができる。そのアンケート結果から先生が自らの指導について振り返ることができるため、日々の指導に活用している。

次に、効果的な取組については、放課後などの時間を活用し、子どもと先生が一对一で話をする時間を設けている学校がある。取組によって、子どもと先生の関係性が良くなったケースもあるという報告を受けている。

(岡崎市長)

子どもと先生の相性によって、両者のマッチングが上手くいかないこともあるが、そこをカバーし、また乗り越えながら人間関係を築いていかなければいけない。本市では、平成23年度から、生活保護世帯や生活困窮世帯の子どもたちなどへの学習支援を行う高知チャレンジ塾を実施している。教職員やOBの方々の非常に精力的な支援により、市内10か所で合計300人ほどが参加している。学校の先生や親に直接相談しづらい子どもが多

くいる中、高知チャレンジ塾が何でも相談できるサロンの役割を果たしている。チャレンジ塾に行く子どもにとってはそこがサードプレイスとなるので、その存在が大事な意味を持っている。

(松下教育長)

先ほど事務局からの説明にあったように、不登校については、平成16年度から学級や授業づくりに取組、また組織の在り方を検討してきた。その結果だけを見ると、大きな成果が出ているわけではない。しかしながら、不登校について考えることは、結果的に学校の運営や子どもへの関わり方を強く、そして広く見直すことにつながっている。また、事務局から学校現場、また教育委員会へという私自身の経験を高知市の取組に対して生かしていると思っている。子どもたち一人一人に効果的な対応ができていないわけではなく、それを3年目となる今年の中での集約しようとしている。2月には、教育長への提言が提出される予定であり、積極的に意欲的に取り組んでいただいているとお聞きしている。提言を非常に楽しみにしており、活用したいと思っている。

私は校長会の場で必ず、校長の言葉で校長の思いを職員に伝えるよう何度も伝えていく。担任や教科担任が、子どもたちに、自分の言葉で思いを伝えることが基本であると委員のご意見をお聞きしながら思った。基本に立ち返り、改めて取り組むこと、校長先生方にもそれを伝えていきたい。

(岡崎市長)

不登校については、今後新たな不登校を生じさせないよう早期の対応をしていく。

教育委員会としてはこれまで、一貫して不登校に取り組んできた。亡くなられた吉川元教育長は小学校がご担当であり、当時から誰一人取り残さない、一人一人の子どもに徹底的に関わるということをよく言っていた。その原点は今でも変わっていないと改めて思っている。また、不登校の担当教員の方々から提言書が2月にいただけるとお聞きしているので、それを生かしていきたい。

- (2)「オーテピア高知図書館取組報告」について、教育委員会事務局から資料に沿って説明。

(森田委員)

生活に困ったときに頼る場所として図書館を利用される方もいると思うが、オーテピアには、本だけでなく生活するうえで必要な情報を掲載したチラシやパンフレットがたくさん置いてある。学問的な書籍と共に、困りごとを抱えている人が今必要としている情報を得られる書籍の両方が蔵書されていることが、高知市の共生社会を目指すうえで非常に大事な取組になるのではないかと考える。

次に、電子書籍の利用については大変便利に感じている。オーテピア図書館では約5900

タイトルを読むことができるということだが、一般的な図書館と比べ、このタイトル数は少ないのか多いのか教えていただきたい。また、電子図書館を更に強化していただければ、私も含め利用が進むと思う。

最後に、本の貸出し予約についてだが、以前貸出し予約をしようとした際、私の前に予約者が90人ほど待っており、借りることを断念したことがあった。人気のある書籍については複数冊用意するなど、対応していただきたい。

(図書館科学館課 高石図書館・科学館担当参事・市民図書館長)

来館者が必要としている情報にどうすれば辿り着けるかを意識し、関係部署と必ず協議しながら書籍や本棚の配置を行っている。

電子書籍のタイトル数については、そもそも電子書籍自体のシェアが全体の8パーセントほどで、これから発展していく分野である。書籍のライセンス契約を結んでいるが、予算も限られているため、読まれる回数の少ない書籍は廃止し、新刊を新たに契約しながらタイトル数を揃えている。

貸出し予約については、予約者が一定の人数に達した場合、副本を購入している。その場合でも、あまりに予約者が多い場合はすぐに借りられない状況となるので、今後検討していきたい。

(岡崎市長)

オーテピアは、平成30年に、全国で初めて県市共同運営の図書館という形でスタートした。場所が追手前小学校の跡地と利便性が高く、また非常に県民市民の関心が高かったため、5年前のオープン時から大変多くの方々に利用していただいている。昨年12月末時点で、累計388万人の方が利用されており、今年度末までには400万人を達成する見込みである。全国から絶えず多くの方に視察にも来ていただいている。また、図書館の外観だけでなく、展開されるサービスが評価されたことから、昨年7月に日本図書館協会から第38回日本図書館協会建築賞をいただき、全国的に非常に注目されている。

一点質問だが、電子ブックのライセンス期間はどのぐらいか。

(図書館科学館課 高石図書館・科学館担当参事・市民図書館長)

書籍によって異なり、一年もないような短いライセンスもある。毎年ライセンス契約を結ぶ形になっている。

(岡崎市長)

文部科学省の今後の予定では、教科書自体が電子化されることになっている。著作権の問題もあるが、今後更に電子書籍の利用が進むことを期待する。

(野並委員)

不登校対策と図書館の取組報告という二つの議題が並ぶことが象徴的だが、図書館自体が不登校対策の一つの手段になりうるのだと感じた。

電子図書については、今後更に進めていただきたい。一方で、実際に図書館に来てもらう取組もされている。子どもの頃、図書館の本のあまりの多さや著者の思いに感動した記憶がある。電子図書では伝わらない感動や多様性を実感する体験はとても大事なので、来てもらう取組も続けていただきたい。

最後に、私が一番興味を持ったのはサポーター制度である。素晴らしい図書館をできるだけ応援していくため、ふるさと納税のような制度を企画すれば、支援を希望する人も出てくるのではないかと思った。

(岡崎市長)

ニューヨークの公立図書館で大変有名な図書館がある。お金はないが時間はある若者が図書館にこもり、書籍を読みあさり、最終的にIT企業家として成功していく人材を輩出するような図書館である。そこにはニューヨーク・カーネギー財団から年間100億円ほどの寄付があり、税金を投入する必要がない。また、図書館内も一風変わっており、ハローワークが館内に組み込まれ、求人広告が出されている。

オーテピア図書館では、求人票を出しているか。

(図書館科学館課 高石図書館・科学館担当参事・市民図書館長)

公共施設の求人に関しては、3階のビジネスのフロアに置いている。就職相談会のようなイベント会場としても利用されており、その際、出前図書館として関連する本を提供している。

(岡崎市長)

図書館は様々な人が育っていく場所であり、オーテピア図書館から多くの人材が輩出されることを目標にしている。

(西森委員)

先ほど野並委員が言われたように、私にも小さい頃、本がたくさん並んでいるところを歩くのが嬉しかった記憶がある。回遊し、タイトルを見るだけで学びになる場所であり、歩く価値のある素晴らしい場所である。また5年間、日本初や日本唯一と言われながら、多くの取組を同時進行で進め、そのトップに認められたことに敬意を表する。

図書館という場所は、本があり、読め、借りられる場所であるという既成概念に、私自身が囚われていると感じた。オーテピア図書館についても、暗くて四角いところが明るい場所になったというようなイメージから脱却できていない。ソフトは変わらずハードが変わったというぐらいの認識に留まっている可能性がある。実際には、図書館という既成

概念からはかなり大きく枠を越え、市長が言われたとおり、居場所や学びの場、交流の場、情報発信の場、イベントを行う場にもなる、多くの機能を備えた総合的なアミューズメント拠点であるといえる。

そこで、この現状を市民に打ち出してもいいのではと考える。本に用がなければ行かないと、いまだに思っている人がいるかもしれない。オーテピア図書館では、科学館もあり多様なことができるので、来館を促すような発信をしてほしい。図書館というものの意味自体を含め、自信を持って発信できる段階に来ていると感じた。

(谷委員)

私には、県外から高知へ数年間赴任するという知人が多いが、これほど様々な種類の本が蔵書されている図書館は中々いないと口を揃えて言われるので大変嬉しい。私も居心地のいい場所だと感じている。方針が図書館全体に行き渡っているからか接客も大変良く、その点が集客力を高めているのだと感じる。また、日本図書館協会建築賞を受賞されたというのは、建物はもちろんのこと、展開されているサービスが優れているからだと思う。幅広く色々なことに取り組んでいるところが良いと思った。

マイナンバーカードの普及促進について、総務省広報誌に優良取組事例として掲載される予定と資料にあるが、総務省広報誌への掲載は珍しいことなのか。他の図書館ではできていない取組なのか、教えていただきたい。

(図書館科学館課 高石図書館・科学館担当参事・市民図書館長)

マイナンバーカードの取組に関しては、デジタル化も含め普及促進そのものを総務省が管轄している。今回、好事例ということで取り上げられることとなった。ただ高知市、高知県が初めての取組ということではなく、導入時には先進地を視察した。数は多くないが、いくつかの図書館で既に取り組まれている。調査時点では、導入済みが1府12県、導入予定が1道5県だった。

(谷委員)

今後もし是非取組を進めていただきたい。

(岡崎市長)

オーテピア図書館は中四国でも最大規模の図書館である。中高生に大変人気のあるティーンズノベルは大体揃えている。また、外国語の本は英語に限らず中東の地域まで揃っている。例えば、インドネシアのスラバヤ市とは交流があり、スラバヤ市から高知に來られ働いている方が多くいる。アジアなどからの留学生も多いので、自国の本がないという切実な状況にならないよう書籍を揃えている。そのことから、蔵書の内容に特色があるともいえる。

(図書館科学館課 高石図書館・科学館担当参事・市民図書館長)

多文化サービスを行っており、様々な国の本を置いている。読み物としての意味もあるが、生活のため、母国の新しい情報を取り入れる意味でも新鮮な書籍を取り入れている。

(松島副市長)

マイナンバーカードについては様々なご意見を賜っている。今の内閣の方針として、デジタル時代のパスポートだという言い方をするが、中央省庁では、マイナンバーカードを職員証として使用し、どこでもセキュリティカードとして利用できるシステムを導入している。マイナンバーカードの裏にあるセキュリティチップ内に様々な情報を埋め込むことで、様々なカードの一体化が可能となっている。図書館カードもその一つであり、総務省では、マイナンバーカード一つで健康保険証や運転免許証等の代わりにできるよう関連する法改正を進めている。

オーテピア図書館の取組は、濱田知事の声掛けで始まった県市連携のプロジェクトである。総務省の中でも好事例の一つだという認識があり、広報誌に取り上げられることとなった。

(松下教育長)

1月の校長会で、館長がGIGAタブレットでの電子図書について実際に操作しながら説明したところ、校長会での空気が一気に変わった。校長たちは非常にこの取組に期待している。図書離れが進んでいると言われるが、タブレットの利用によって図書館と子どもたちを結ぶことができるのではと期待している。

もう一点、学校の中で評価をしない大人というのがとても重要である。養護教諭や売店の方、事務職員、特に図書館支援員の存在が非常に重要で、子どもたちが図書館に立ち寄ったときに声をかけてくれる、そういった働きかけが非常に大事になる。不登校対策の一つとして図書館の機能を活用できるのではないか。不登校対策においても学校の活性化においても、図書館支援員をはじめ図書館の機能を利用するという観点で取り組むことができるのではないかと感じた。

オーテピア図書館は、場所も建物も内容も全て自慢できる図書館である。更に、県市で運営しているという点が一番の自慢であり、県市連携の象徴にもなっている。今後も、愛される図書館になれるよう努力していきたい。

(岡崎市長)

本日は貴重なご意見をいただいた。子どもたちにより良い学びの場を提供するため、教育委員会や学校現場と連携し、オーテピア図書館サービスの更なる発展、充実に取り組んでいきたい。

● 閉会